

教育課程・カリキュラム

第6章

教育の内容

新田司

1 教育課程の編成

1. 教育課程とは

「教育課程」とは、学校や幼稚園がめざす教育目的や教育目標を実現するために必要な教育内容を選び、選んだ内容を計画的に組織して、編成したものである。英語ではカリキュラム (curriculum) といひ、ラテン語で「走ること」を意味する currere が語源とされ、「競争路のコース」や「生涯」などの意味をもつ。この言葉は16世紀後半頃に登場するが、その頃から学校において学習が目的をもって計画的に進められるようになったと考えられる。

2. 教育課程の編成と類型

カリキュラムを編成するうえでまず必要になるのは、教育目的や目標を設定して、その達成のためにどのような「内容」をどのような「順序」で教えるのか、ということである。選択された学習内容の範囲は「スコープ (scoop)」, その内容を学年や子どもの能力で配列したものを「シーケンス (sequence)」と呼び、この「スコープ」と「シーケンス」の原理を用いて学習内容が設定される。国際的な学力調査で知られる IEA (国際教育到達度評価学会) によれば、カリキュラムには学習指導要領など国家や教育制度によって作成される「意図したカリキュラム」、現場の教師が教育環境や子どもの条件を踏まえて作成する「実施

したカリキュラム」、そしてこうしたカリキュラムを通して子ども自身が獲得した内容をさす「達成したカリキュラム」の3つがあるとしている。一方、このように組織化され、意図的に実施されるカリキュラムとは別に、こうした働きかけとは無関係に子どもが学習する内容がある。そのカリキュラムは学校や教師による計画的・意図的なカリキュラムである「顕在的カリキュラム」[公式的カリキュラム] に対して、「潜在的 (隠れた) カリキュラム」といわれる。「潜在的カリキュラム」は、学校生活のなかで児童生徒が仲間との関係や教師との関係、学校や教室の雰囲気、教師の雰囲気や言動などや教師が示す価値意識や行動規範などから知らず知らずのうちに児童生徒が学び取り、人間形成に影響を与えるもので、「顕在的カリキュラム」とともに重要な働きをしている。

「教育課程」は戦前の日本では「教科課程」(小学校)、「学科課程」(中学校・専門学校)とよばれていたように、主に学校で教えられる国語や歴史のような教科コースや一次方程式や独立戦争などの教育内容を組織した教育計画と考えられていた。

これに対して、戦後になると「教育課程」は子どもたちが学校でもっとも学習経験の総体と広くとらえられるようになり、以前には「課外活動」として第二義的に考えられていた自治活動やクラブ活動等に正当な位置が与えられるようになって、まさしく教科課程ではなく「教育課程」という用語が定着するようになり、また、しかしながら、「教育課程」を子どもたちの学校における学習経験の総体とすると、今度はその意図的な計画性が看過されるおそれがあります。そこで、本書では次に説明する最近の研究成果も踏まえて、「教育課程」を「子どもたちの成長と発達に必要な文化を組織した、全体的な計画とそれに基づく実践と評価を統合した営み」と定義しておきたいと思ひます。

このように教育課程に教育評価行為を位置づけることは、意図的な計画性に基づいて設計された教育課程から、子どもたちは実際には何を学んだかというリアルな視点をもつことを要請するものです。すると、教育課程の明示的なメッセージだけではなく(「顕在的 (manifest) カリキュラム」)、「隠れた (hidden) カリキュラム」が射程に入ってきます。「隠れたカリキュラム」とは、学校や教師が意図しないに、暗黙のうちに子どもたちの学習活動や人間形成に働きかけ、時には目的意識的な「顕在的カリキュラム」の影響を凌駕する力をもつものです。例えば、その学校の校風や教室の雰囲気、教師や子どもたちを取り巻く人間関係、また学校建築や学校施設などの物理的な環境などがあげられます。このように「隠れたカリキュラム」の提唱は、教育課程の研究をよりリアルなものにすることになりました。ただし、「隠れたカリキュラム」の影響が大きいかからといって、「顕在的カリキュラム」の意義が低下するのではなく、そのような潜在的な影響力を射程に入れた教育課程の研究と実践が求められているのです。

教育課程の次元

実際に運用されている教育課程をよりリアルにみるためには、その次元に着目し

ておくことも大切です。ここでは、IEA が学力の国際調査で使用している、教育課程の3つの次元を紹介しましょう。

- ① 意図したカリキュラム (Intended Curriculum) 国家または教育制度の段階で決定された数学や理科の内容であり、教育政策や法規、国家的な試験の内容、教科書、指導書などに示されており、数学や理科の概念、手法、態度などで記述されている。
 - ② 実施したカリキュラム (Implemented Curriculum) 教師が解釈して生徒に与える数学や理科の内容であり、実際の指導、教室経営、教育資源の利用、教師の態度や背景などが含まれる。
 - ③ 達成したカリキュラム (Attained Curriculum) 生徒が学校教育の中で獲得した数学や理科の概念、手法、態度などである。
- つまり、「意図したカリキュラム」とは国または教育制度の段階で決定される内容であって、わが国では学習指導要領によって代表されるものです。「実施したカリキュラム」とは、そのような「意図したカリキュラム」を念頭におきながら、学校や地域、担当する子どもたちの諸条件を勘案して、教師が実際に子どもたちに与える内容のことです。そして、「達成したカリキュラム」とは、そのように「実施したカリキュラム」を通じて、子どもたちが獲得する内容のことです。
- このように教育課程を3つの次元で意識化することは、それぞれの次元には他の次元に解消されることのない固有な課題があることを示しています。

1 教育課程再編の先がけとしての生活科

生活科と小学校教育課程の再編構想

1992年4月、小学校1~2年の社会科と理科を廃止して、生活科が新設されました。この変更は、小学校低学年の理科と

社会科の約50年の歴史を閉じる大きなできごとでした(低学年理科は1941年、社会科は1947年に設置)。生活科では、自然や社会の個々の事実についての認識指導に力点を置くのではなく、「自分と身近な人々、社会や自然とのかかわり」を学習対象とし、「自分自身や自分の生活について考え」その過程で「生活上必要な習慣や技能を身に付け」「自立への基礎を養う」ことを目標としています。生活科新設は、教育課程編成にとっては、次にあげるように従来の教育課程の教科・領域の構成と内容、計画・実施・評価に関わる考え方を問うものでした。

子どもと学校 (武内清編) 学文社

第5章

カリキュラムと子ども

松尾 知明

カリキュラムとは、何だろうか。
カリキュラムという用語は、ラテン語の「クレレ (currere)」に語源をさか

のほることができ、「走るコース」あるいは「走る活動・競争」を意味していた。また、「人生の来歴」といった意味もあり、現在でも「履歴書 (curriculum vitae)」といった言葉がある。これが、教育において、学科の課程 (course of study) のように、教えるコースあるいは学びの道程といった意味をもつようになったのである。

カリキュラムを訳すと「教育課程」になるが、カリキュラムの概念は、教育計画としての教育課程よりもずっと広い。たとえば、意図的・計画的な「顕在的カリキュラム」に対して、意図していないのに学校において知らず知らず学ばれる「潜在的カリキュラム」の概念もあるし、学びの個人誌あるいは履歴という意味で「子どもの教育経験の総体」といったとらえ方もある。ここでは、カリキュラムを子どもの学びの経験と広くとらえたい。

子どもたちは、小学校から高校を卒業するまでに、1万数千時間の授業を受けることになる。その膨大な時間に、どのような学びの経験を準備するかによって、子どもたちの学力形成は大きな影響を受けることになるだろう。

さて、カリキュラムのデザインには、次に検討するように、行動主義と構成主義の2つの教育パラダイムが併存している。

(2) 構成主義学習理論とカリキュラム

一方、認知科学の発達を背景に、構成主義の学習理論が成立することになる。構成主義の心理学においては、学習は、認知構造の変容を意味する。すなわち、学習においては、新しいことが「わかる」ことがめざされる(植木, 2006, pp.160-171)。

構成主義に立てば、学習は、白紙の状態にある子どもに、断片的な知識を蓄積していくものではなく、すでにもっている認知の枠組みに、新しい知識を関連づけ、組み込んだり、組み替えたりしていく営みを意味する。